

盲ろう児への支援事例

堀内 恭子（日本ライトハウス視覚障害リハビリテーションセンター 養成部）

1. 目的

聾学校高等部2年生になる盲ろう児Mへの支援を振り返り、教育や福祉機関等がどのように関わりを持ってきたのかを明らかにすることで、今後の課題や支援のあり方を考察する。

2. 事例

(1) プロフィール

性別・年齢：男性・17歳、聾学校高等部2年
在籍

眼疾患等：網膜芽細胞腫

視力他：両眼共全盲（義眼）、視覚障害1級、
聴覚障害2級

受障時期：1才11ヶ月時に左眼摘出、4才
11ヶ月時に右眼摘出、3歳児に聴覚障害判
明

既往歴・合併症：感音性難聴（聴力：右93dB、
左91dB）

家族構成：両親、姉と同居

コミュニケーション手段：触手話・指文字で受
信。一部の音声の認識可能。手話や指文字で
発信し、一部音声言語有り。

(2) 経緯

日本ライトハウスは、和歌山県、奈良県、堺
市、宝塚市の4自治体から委託を受け、在宅指
導を行っている。

Mは幼稚部より聾学校に在籍し、盲学校にお
いても点字や歩行訓練は受けていたが、盲学校
では、自宅近辺の歩行訓練を行うことが困難と
のことで、2002年度（8才、小学部2年）より
在宅指導の申請があった。

当初の主訴は、「自宅近辺の歩行ができるよ
うにして欲しい」とのことであった。

2002年度から2004年度までは前任者が担
当し、Mに対しては、自宅近辺の歩行訓練や手
引きのされ方を指導し、聾学校の教員に対して
は、屋内の歩行方法や手引きの仕方を指導した。

2005年度から発表者が担当することとなっ
た。表1に発表者が実施してきたこと、聾学校
や他機関との連携の経緯を示す。

3. 考察

表1のように毎年聾学校の授業見学を行い、
先生方とのカンファレンスなども積極的に行っ
てきた。3回から8回と非常に少ない回数なが
らも、発表者にできうる限り他機関との関わり
を持ってきた。以下各機関との連携について考
察する。

(1) 盲・聾学校との連携

発表者が関わってきたこと

聾学校と盲学校は隣接しており、校長先生も
一人であったが、なかなか学校という組織の枠
組みの中で、自由に連携をとることが困難な部
分もあり、母親の要望なども含め、発表者が双
方と連絡を取り合い調整を試みた。

盲学校の歩行訓練士であるT教諭が自立活動
の担当になってからは、聾学校に来校しての指
導になったこともあり、T教諭に聾学校での実
態を把握しながら対処してもらえるようになった。

直接T教諭と発表者がMの様子について情報
交換を行うことができるようになった。

特に中学部から高等部への進学の際には、環
境も教諭もすべて新規な状況になるため、引継
ぎやMを受け入れる準備を整えることを発表者
が強く主張し、ある程度の準備を整えた上での
スタートをきることができた。

表1 発表者・他機関の関わりの一覧

学部	年度	Mの様子	発表者の関わり		学校内の関わり(教育相談、自立活動等)	東京大学先端科学大学O先生の関わり	国立特殊教育総合研究所N先生の関わり	T盲学校H先生の関わり	障害者サポートセンターの関わり
			訓練内容	他機関との関わり					
小学部	2005年度 小学部5年	Mの大好きなトーマスのグッズを集めている。毎年日本ライオンハウスで開催されるライトハウス祭りに母親と参加。月に1、2回地域のトランポリン教室に参加。面白い教育研究会、ふうわ(盲ろうの子どもとその家族の会)に参加。	5回	らう学校の授業見学、校内での歩行訓練、盲学校における教育相談の見学	盲学校にて教育相談。長さ、重さ、距離などの単位についての学習、点字のますあけの指導など。	自宅にてパソコン指導メール環境の整備。パソコンの操作の指導。盲学校への指導、助言の可能性を提示。	月に1回聾学校にて教科指導に関する助言、指導。	N先生と共同して聾学校にて教科指導に関する助言、指導。	小学部3年より移動支援、身体介護の利用。月に4~5回。1回30分~1時間の公園への散歩、買い物。
中学部	2006年度	申請が間に合わず訪問できず	8回	らう学校の授業見学。教育相談担当教諭、担任等とのカンファレンスに参加。紙での点字の読み書きの重要性を認識。絵本を教材として使用している実態を知り、メール導入には語彙の課題が大きいかを再認識する。 トランポリンの教室に参加。 ガイドヘルパーの公園への散歩に同行。手引きの方法について助言。	らう学校の教育相談において、点字の指導。らう学校の自立活動では、パソコンで教員と共に絵を描き、レースライターなどで色を塗るなどの作品制作。	自宅にてパソコン指導メール環境の整備。パソコンの操作の指導。盲学校への指導、助言の可能性を提示。	月に1回聾学校にて教科指導に関する助言、指導。	N先生と共同して聾学校にて教科指導に関する助言、指導。	公園への散歩。
中学部	2007年度 中学部1年	完全教科担当。特別活動、道徳以外に個別指導。陸上部、調理クラブに加入。スクワールバスの時間に合わず母親が送迎。大仏マラソン、市民マラソンに挑戦(以後毎年)	5回	らう学校の教育相談に歩行訓練士のT教諭が関わるようになった。Mにとっての有効な手引きの合図を考案した。Mには手引きのされ方の指導も同時に行なった。 自宅でのメールの読み書き。読み書きが単独ではできず、文章を手書きや指文字で確認しながら進める。具体的な質問に答えることは可能であるが、自主的に文章を書くことは困難。	らう学校の授業参観。教育相談担当教諭、担任等カンファレンス。歩行訓練士T教諭は自立活動を担当。歩行訓練士T教諭は日本ライオンハウスの指導者養成課程において母親、盲ろう教育研究会(T盲学校)のH先生に講師依頼。講義を受講し盲ろう児やMについての理解を深める(以降毎年)。ガイドヘルパーの買い物に同行。手引きの方法について助言。	自宅にてパソコン指導メール環境の整備。パソコンの操作の指導。盲学校への指導、助言の可能性を提示。	月に1回聾学校にて教科指導に関する助言、指導。	N先生と共同して聾学校にて教科指導に関する助言、指導。	公園への散歩。
中学部	2008年度 中学部2年	担当の先生が変更になった。	6回	らう学校の授業参観。学校長、教育相談担当教諭、歩行訓練士T教諭、担任等とカンファレンス。 奈良盲ろう者友の会設立記念大会に参加。高等部の教員に手引きの合図を指導。 T盲学校のH先生、R先生、A君がプレイルセンズブラスにてメールの送受信の指導を行った。高等部連学に当たり、新教室、下駄箱などの歩行訓練も実施。T教諭と共に高等部の先生方に手引きの合図について伝達した。	歩行訓練士のT教諭が、自立活動の時間には聾学校にて指導。 白杖の基本操作、教室からトイレ、保健室、美術室、理科室までの歩行訓練を実施。移動は可能になるが、白杖の操作技術の定着が課題。 ハーキンスによる点字の会話を録音、プレイルメモケットとパソコンでの会話を導入。自ら質問するなどの積極性が見られたが、マスあけなどの点字表記に関して課題有り。	自宅にてパソコン指導メール環境の整備。パソコンの操作の指導。盲学校への指導、助言の可能性を提示。	月に1回聾学校にて教科指導に関する助言、指導。	N先生と共同して聾学校にて教科指導に関する助言、指導。	公園への散歩。
中学部	2009年度 中学部3年	音に意識。誰が何をしていたのかを知りたい。同室の他の生徒への関心や他の事柄への興味心が広がりはじめた。	3回	「プレイルセンズブラス」でのメールの送受信について復習をした。長期休みに、学校で使用している「プレイルテンダー」を持ち帰った。先生方はローマ字入力、パソコンの画面上の文字で確認。Mは6点入力、プレイルテンダーで文字の確認を行っていた。自宅においても同様の文字入力と読み取りの指導を行った。 サーチエイドの体験も行ったが、ピンディスプレイ表示が不適切であったり、検索結果の内容が難しいものもあった。自主的に検索してみたいと思えるような指導が必要。	らう学校の授業参観。学校長、教育相談担当教諭、歩行訓練士T教諭、担任等とカンファレンス。 奈良盲ろう者友の会設立記念大会に参加。高等部の教員に手引きの合図を指導。 T盲学校のH先生、R先生、A君がプレイルセンズブラスにてメールの送受信の指導を行った。高等部連学に当たり、新教室、下駄箱などの歩行訓練も実施。T教諭と共に高等部の先生方に手引きの合図について伝達した。	自宅にてパソコン指導メール環境の整備。パソコンの操作の指導。盲学校への指導、助言の可能性を提示。	月に1回聾学校にて教科指導に関する助言、指導。	N先生と共同して聾学校にて教科指導に関する助言、指導。	公園への散歩。
高等部	2010年度 高等部1年	普通科 自分から行動をすることが課題	3回	担当教諭、主事とカンファレンス	高等部の新教室からトイレや他の教室への歩行訓練の実施。 プレイルテンダーでの会話。英語入力時のパソコンのトラブルの対処等。自分できちんことを増やすことを目的とする。自分エアドコンの電源のオン、オフの状態をボードに表示することで、Mに伝わるようにした。 指字がないとトイレに行かなくなかったが、2学期末に自主的にトイレに行くようになったこと。	自宅にてパソコン指導メール環境の整備。パソコンの操作の指導。盲学校への指導、助言の可能性を提示。	月に1回聾学校にて教科指導に関する助言、指導。	N先生と共同して聾学校にて教科指導に関する助言、指導。	公園への散歩。

(2) 連携の中で発表者が気づいた教育的視点

コミュニケーション、学習手段

学校でのパソコン、ピンディスプレイを使用
してのメールの導入を発表者が提案したが、誰
かと話しをしたいという自主的な思いを育てて
いくことが最優先であること。

ピンディスプレイは一行表示である。紙全体
をさわりながら指を動かして点字を読んだり、
書いたりすることで全体が把握できる。機器
類に依存しすぎると、万が一壊れた場合に学習
の手段がなくなること。

点字タイプライターや点字盤を使用しての学
習経験の重要性をカンファレンスにて助言され
た。将来に向けて様々な可能性を探る必要性が
あることに気づいた。

歩行訓練

将来どこに行ってもきっちり白杖の基本的な
操作ができるように、基礎的白杖操作技術（タ
ッチテクニック、伝い歩きなど）の定着、習慣
化が重要であること。

本来、手引きの合図がなくてもMは自ら白杖
を使用して状況判断できる能力はあるが、将来
誰がどのような形でMを手引きするかわからな
い。支援者に対して手引きの合図や方法を統一
することで、双方の混乱を防ぐことができると
いうT教諭の提案のもと手引きの冊子を作成
することができた。その結果、校内でも教員間
で共通認識を持ってもらいながら、Mに接し

てもらうことができた。

以下、手引きの合図について述べる。

表2には、手引き者の合図の一覧を記載して
いる。

写真1 腕の持ち替え

対象者が握っていない方の手の甲を手引き者が1回
たたく



表2. 対象者用サインの一覧

内 容	対象者のどちら側の腕かについて	回数など
腕の持ち替え (写真1) 方向転換	手引き者の腕をもっていない方の手の甲 手引き者の腕をもっていない方の手の甲	軽く1回 軽く2回
会話 (手引き者) (写真2) 会話 (対象者) (写真3)	手引き者の腕をもっている方の手 手引き者の腕をもっている方の手	軽く2回 2回一組で繰り返す
上りの一段 (写真4) 上り階段 (写真5) 上りエスカレーター (写真6)	手引き者の腕をもっている方の手の甲 手引き者の腕をもっている方の手の甲 手引き者の腕をもっている方の手の甲	下→上1回 下→上2回 下→上3回
下りの一段 下り階段 下りエスカレーター	手引き者の腕をもっている方の手の甲 手引き者の腕をもっている方の手の甲 手引き者の腕をもっている方の手の甲	上→下1回 上→下2回 上→下3回
溝 (写真7) 電車 (写真8)	手引き者の腕をもっている方の手の指 手引き者の腕をもっている方の手の指	1回掴む 2回掴む
エレベーター (写真9)	手引き者の腕をもっている方の手の甲	開く動作

写真2 会話（手引き者）

手引き者が会話を始める時は、手引き者の腕を持っている手を軽く2回たたく

**写真3 会話（対象者）**

対象者が会話を始めるときは、対象者が手引き者の腕を2回握る

**写真4 上りの一段**

握っている方の手の甲を下から上にさする

**写真5 上りの階段**

握っている手の甲を下から上に2回さする

**写真6 上りのエスカレーター**

握っている方の手の甲を下から上に3回さする



写真7 溝

握っている手の指の人差し指から小指までを1回つかむ

**写真9 エレベーター**

握っている手の甲で手引き者が親指と人差し指をくっつけて開く

**写真8 電車**

握っている手の指の人差し指から小指までを2回つかむ

**(3) 東京大学先端技術大学 O 先生との関係**

パソコン指導に関していつでも相談できる関係にある。聾学校の先生方も直接連絡を取ることができるように、双方をつなげることができた。

(4) T盲学校H先生

教科指導、進路等について、いつでも相談できる関係を築くことができた。

4. まとめと今後の課題

Mは、一部の人とのメールのやり取りは可能になっているが、コミュニケーション手段としてのメールというよりは、点字の学習という印象を与えてしまっているように感じる。触手話で他者との会話を楽しむように、気軽にメールなどを楽しむことでMの世界を広げることができればと思う。

自ら言葉の意味を調べ、語彙を増やすことができれば、点字の本を読んだり、インターネットで検索したり、メールの意味も理解できるようになるのではないだろうか。本事例をまとめることで、連携とは各機関ではなく、人と人とのつながりの延長線上にあるということが、再認識できた。Mにとっては、今後の進路を決定する重要な時期にさしかかろうとしている。今まで以上に各機関の個人個人とのつながりを大切に、より積極的に関わっていきたいと思う。